



政治経済学部
「シーナカリンウィロート大学
短期留学プログラム」参加者の声(2)
田中千裕 / 財満一道 / 宮城寛斗

田中千裕（経済学科1年）

タイでの1か月間は見るもの聞くもの全てが私自身にとって初めての体験で、日々の時間が惜しく感じられました。チェンマイへ行った際、希望の家という孤児院を訪問しました。ここでは、HIVやAIDSに感染している子供たちが多くいます。印象に残ったのは、明るい笑顔とそこにある慣れです。見ず知らずの学生が突然やってきて遊ぼうと声をかけるとほとんどの子は戸惑うこともなく積極的でした。おそらく、よくやってきて一日で帰るこのような大人がここを訪問するからでしょう。それでもやはり子供たちの笑顔はまぶしく感じられました。訪問して終わりじゃだめだ、ここで知ったことを体験したことを何らかの形で子供たちに還元したいと強く思いました。

財満一道（経済学科1年）

最も印象に残っていることは泰日工業大学での学生交流です。初めは、とても不安でした。しかし、タイの学生が笑顔で出迎えてくれてすぐに不安は吹き飛びました。その後は、日本について沢山質問してくれて、日本人としては非常に嬉しいことでした。質問に答える時は、言語以外に、絵を描く、体で表現、様々な方法で意思疎通を計りました。当たり前のことだと思うのですが、とても新鮮でした。答えることのできた質問もありましたが、答えることのできなかった質問も多々ありました。そのモノ自体は理解していても、いざ説明するとなると、よく説明できませんでした。タイだけではなく、日本についてもより理解を深めないといけないと思いました。

宮城寛斗（地域行政学科2年）

カルチャーショックの連続でしたが、タイに行って一番よかったと感じた瞬間はタイ人の友達を作れたことです。タイになれてきたある日、汗っかきだが日差しを防ぐため毎日帽子をかぶっていた僕は、頭が蒸れて炎症を起こしていた。そこでタイの友人に薬局に連れて行ってもらった。友人が薬剤師にタイ語で薬を教えてもらいそれを買った。するとよこでタイの友人が同じくすりを買って僕に渡した。「君と一緒にタイにきてる日本人が同じ症状がでたらわたしてあげて」と言った。感動だった。もし自分が仮に同じ立場だったら同じことをできなかった気がする。他にもタイ人のホスピタリティを感じたことはたくさん経験した。素晴らしい友人にあえて本当に幸せな留学だった。